

## 「ビオトープの中って何があるの」 目黒区立ひがしやま幼稚園（東京都目黒区） [4・5歳児]

### 「科学する心」をどうとらえるか

同じ学級の子どもたち同士、4歳児から5歳児へ、親から子どもへ、保育者と子どもの中で、と伝え合うことが共感を新たにし、感覚を刺激し、自分なりに考えようとし、自分の感性でとらえようとする行為の元となる。そのことから呼び起こされる意欲が科学する心の育ちへとつながる。と考える。

### 事例 「ビオトープの中って何があるの」

（4歳児入園当初）

入園して約1週間が経った頃、35人の4歳児の中には、今まで家で母親と二人だけでの昼間の生活を過ごしていたのが変化したことに不安を募らせ、動きが鈍くなったり、泣き出したりする幼児も出てくる。そこで、園庭の自然に触れながら心の安定を図ろうと、ビオトープの周りに陣取り、みんなで中を覗き込んでみた。

5歳児たちが来て、「ほら、オタマジャクシ、いるでしょ」と、隣に座っている4歳児に声を掛ける。

4歳児のE子は、言われた方を見てじっと目を動かさない。池の中のオタマジャクシがドヨドヨッと動くと、E子が、「あれ、いっぱいいる」と小さな声で年長児に言う。

5歳児が「見て、しっぽあるよ」と、尾をひらひらとさせている一匹を指差す。

E子は安心したように、もう一度よくビオトープの中を覗き込む。



### 分析

- ・ 入園したての不安感を、5歳児が感じとり、4歳児へ温かい接し方をしていく。
- ・ ビオトープという自然を生かしたものの存在が、幼児の園への親しみを想起させている。

### 考察

自然の中で遊んでいると「これはなに？」と思うことにたくさん出会う。そのことが初めての出会いのときもあるし、以前に知っているものでも自然のなかでは出会うたびに姿が違っていたりする。

子どもたちは、そのような自然との出会いの中で「なぜ」「どうしたらこうなるの？」と考えながら、それを友達同士で伝え合ったり具体的な動きにして表したりしている。また、じっと観察するだけのこともある。

このように子どもたちは、自然という媒介に対して、感じ合う相手と伝え合い、その体験を通して自分の感覚で受けとめ、自分なりに反応し、感じ考えようとしていく。そのような姿の中に、科学する心を働かせている様子を見ることができる。

### みどころ

動植物など自然は子どもたちの心を引き付け、興味の対象をよく見たり思ったことを言葉にしたりする行為が引き出されます。この事例からは、4歳児の心の安定や園生活に魅力を感じるようなビオトープが、5歳児との交流の場にもなることが分かります。飼育栽培物を身近に置いて親しみをもつ環境も大切ですが、異年齢の園児が交流できるような共有の場の自然環境は、温かなかわりを通して「科学する心」が育まれる体験をすることができる重要な場です。